

三 仮名遣いに関する問答

(昭和二十八年と昭和三十三年)

文部省調査局国語課

文部省(文化庁) 国語課で編集・刊行した国語シリーズ

(昭和二十六年と昭和四十七年)のうちの「国語問題問答」

第一集(昭和二十八年)と第六集(昭和三十三年)の中から

仮名遣い関係の問答を取り出し、原資料の順に排列したもの。

検索の便を図るため全体に通し番号を付け、また目次を掲げ

た。(原文は横書き)

目次

- 1 かなづかいの意義
- 2 不統一なかなづかい
- 3 助詞「は」と「へ」
- 4 「は」「へ」と「わ」「え」
- 5 「ゆう」か「いう」か
- 6 「とおる」か「とうる」か
- 7 「きれい」か「きれえ」か
- 8 「地」は「ぢ」か「じ」か

- 9 「はなぢ」か「はなじ」か
- 10 「づつ」か「ずつ」か
- 11 「まぢか」か「まじか」か
- 12 「世界じゅう」か「世界ぢゅう」か
- 13 「基づく」か「基く」か
- 14 「魚づくし」か「魚ずくし」か
- 15 「腕づく」か「腕ずく」か
- 16 四段活用か五段活用か
- 17 「オーイ」という呼び声は「おい」か「おうい」か。
- 18 「大阪」を「おおさか」と書くよりも、むしろ「おうさか」と書くことに統一してほしい。
- 19 「ぢ、づ」の例外の書き方は、固有名詞にも適用しますか。次の地名の新かなづかいをお尋ねします。
- 20 よう音(わたる音)の「や、ゆ、よ」を、ルビでも小さくすべきではないか。
- 21 長音の「う」
- 22 助詞の「は」
- 23 「会津」「国府津」の「津」のかなづかい
- 24 「利雄」さんのふりがな
- 25 「今日は」と「今晚は」
- 26 「きうり」か「きゅうり」か

- 27 「は、へ、を」の除外例
 28 「じ、ぢ」「ず、づ」の書き分け
 29 「藤原」のふりがな
 30 「志津子」のふりがな
 31 「国旗」
 32 「ちえっ」
 33 「世界じゅう」と「世界ぢゅう」
 34 「本則」ということ
 35 二語連合ということ
 36 「がっかい」か「がくかい」か

第一集（昭二八・七）

1 かなづかいの意義

【問】 かなづかいというのは、発音記号ではなく、正書法に関するものです。現代かなづかいもまた、かなづかいという以上、正書法であるし、一つの語は、いつ、どこで、だれが書いても同じものであるべきです。それを、地方によって、「クワ・カ」「ヂ・ジ」など、発音を区別して書き分けてもよいと認めているのは、正書法にも反するし、標準的発音に基づくという精神とも相入れないものです。また、ある新聞は、「うなづ

【答】

く」「ぬかづく」「ひざまづく」と書き、他の新聞は、「うなづく」「ぬかづく」「ひざまづく」としているといった調子です。また「世界じゅう」「一日じゅう」があるかと思えば、「世界ぢゅう」「一日ぢゅう」があります。文部省の御意見を伺いたいのです。

「現代かなづかい」の根本の方針はそのままにいわれているように——現代語音に基いて現代語をかなで書き表わす場合の準則を示す——ことにあるのです。そしてわれわれ現代の国民にとって特に次代の日本を築くべき多くの少年・少女にとって、「現代語音を基準とする」かなづかいが、国語の書き方をやさしくし、能率的にすることは申すまでもないと思います。

「現代かなづかい」が国民特に少年たちを古いかなづかいの重荷から解放することの意義は大きいし、国語がほんとうに国民の国語になっていく上に役だつことは必ず大きいと信じます。地方によって、「クワ・カ」「ヂ・ジ」等をいい分けているところはかきわけでもさしつかえないとしておりますが、指摘しておられるように、厳密に一定したいわゆる正書法の理想からいえば、確かに細則の定め方において妥協的なところがあるといえます。

これは理論上の一貫性に縛られて、かえって多くの人が実行する上にぐあいが悪いようであってはならない。こういう心配りから国語審議会では融通性をもたせたものと思います。しかしみんなが守るべき本則・基準を示した上での妥協なのです。ですから、「ク・カ」「ヂ・ジ」の例についていえば、「カ」「ジ」と書くのが基準ですから、このほうが望ましいのですし、やがて国民全体に一定の書き方が行われることになりましょう。こういう一部の妥協性によって、「現代かなづかい」の意義が失われるとはいえませんが、

次に指摘されたように二語の連合によって生じた

「ち・づ」は「ち・づ」と書くという細則については、それぞれの解釈の違いによって、「うなず（づ）く、ひざまず（づ）く、世界じ（ぢ）ゆう」のように違いが生ずるわけで、しかもそれぞれ理論的には決して誤りとは認められません。こうした違いの生ずることははそうたくさんあるわけではありませんが、こうした種類のことはには具体的に書き方を定めることが必要と思います。文部省でもこれについては部内で論議を重ね、だいたいの基準をつくってこれを教科書に採用して態度を明らかにしました。

指摘された「世界ぢゅう」か「世界じゅう」かは、その結果、公的な書き物には今のところ「じゅう」を採用することに定めたのです。したがって、こどもに質問された場合には教科書どおりに「じゅう」と教えてくださればよいのです。

こうした問題は学問的な考え方の違いによって意見の分れることもあります。お互に研究し合うことによってよき一致点を見いださうものと信じます。これは国民全体の問題であり、要は現代と将来の日本国民のためによき国語の書き方をつくりあげようという仕事ですから。

2 不統一なかなづかい

【問】 こどもの本を見たところ、社会科教科書に、「わが国土」というのがあって、その中に焼津・会津・飯塚などの地名が「やいづ」「あいづ」「いづか」とふりがながしてあり、また別の教科書には、「やいず」「あいず」「いづか」となっています。いったいどちらが正しいのですか。

【答】 焼津・会津などは津の文字から濁って「づ」とするのが漢字使用の常識的な考え方ですが、一方固有名詞としてこれらの地名を考えたとき、漢字の観念を離れ

て発音そのものから、「やいず」「あいず」とかな書きする考え方も成立します。

また現代かなづかいには二語連語による濁音として貝塚・才槌は、「づ」であって、「ず」ではないと規定してありますが、手綱・手力などの手は一種の接頭語とも考えられて、これを二語連語と考えるか、複合した一語と考えるかによって、「たづな」「たぢから」と解することも、また「たずな」「たじから」と書くことも許されます。いずれにしても、「づ・ず」「ぢ・ぢ」の書き分けは現代かなづかいの最も大きな問題で、まだはっきりした解決は与えられていません。現段階では両方とも正しいものと思えます。ただこの問題について、教科書の間に不統一のあることはこまったことでして、今後統一に向かうよう努力するつもりです。

3 助詞「は」と「へ」

【問】 現代かなづかいで、「わたくしはそこへ行く」の「は」は当然「わ」に、「へ」は「え」とすべきであるのに、へんに妥協しているのは、その趣旨を考えると、どうも釈然としないものがあります。

【答】 現代かなづかいで、助詞の「は」「へ」「を」を除

外としたのは、一般に深く目の印象にはいっていることとて、これを発音どおりにすると、反対が多いことも顧慮したものでありますが、将来は発音どおりになるかもしれません。だが当分はあのおりで進むことに国語審議会では全員一致して決めたものであります。けれど除外例を設けてありますから、「わたくしわ」でも認めることになっています。

4 「は」「へ」と「わ」「え」

【問】 助詞の「は」「へ」も「わ」「え」と書くのがよいと思いますが、それが実現する可能性と時期について見とおしを教えてください。

【答】 「は」「へ」を「わ」「え」にするという可能性なり時期なりについては、現在、賛否両論がありますので、今日のところまだ何とも予想が付きません。

5 「ゆう」か「いう」か

【問】 「言う」は「ユウ」と発音するのに、新かなづかいで「いう」と書くのはなぜですか。その活用をも示してください。

【答】 「言う」は「ユウ」と発音するようですが、それを「ゆう」と書くと、文法上、動詞の活用の説明が複雑になるので、特に「いう」と書くことになっています。

なお動詞「いう」の活用は次のとおりです。

わ
ナイ
い
マス
う
え
バ
お
ッ
(または おう)

「いおう」の「おう」を分解して、語尾の「お」と助動詞の「う」とに分けて考えることも、また「おう」という一つの語尾と考えることもできます。

6 「とおる」か「とうる」か

【問】 「通る」は「とうる」ではいけませんか。いけないとすればその理由はどうか。

【答】 「通る」は、現行の規則では、「とおる」と書くことになっていきます。それは、旧かなづかいで「とほ」と書いてあるところ(音節)は、長音ではないという考え方から出ています。

7 「きれい」か「きれえ」か

【問】 「きれい」「せんせい」などは「きれえ」「せんせえ」と書くのが正しくはありませんか。

【答】 「きれい」「せんせい」のかなづかいは、字音の「麗」「生」のかなづかい(従来のまま)によったの

ですが、その発音は、エイ(二色母音)でもエー(長母音)でもよいことになっています。

なおこれは、ローマ字のつづり方で、“kirei, sensei”などと書いて、しかも「キレイ」とも「キレー」とも読んでいるのと一致しています。

8 「地」は「ぢ」か「じ」か

【問】 「地震」「地面」または「布地」などの「地」を、新かなづかいで「じ」と書くのはなぜですか。こどもには「地」に対して「ぢ」と書くことに賛成するものがありますか。

【答】 「地」の音は、元来、漢音チ、呉音ヂで、そのヂは連濁のヂではありません。もとからの(すなわち本来固有の、連濁でない)音です。

現代かなづかいでは、ヂ・ジの音を区別せず、連濁の「ぢ」のほかは、すべて「じ」と書くことになっていますから、

地震 この服は 地 がよい。

なども、みな「じ」と書くのです。

また「服地」「生地」などの「地」も、この「地」であって、連濁の「ぢ」とは認めず、したがって「布地」などの場合の「地」のかなづかいも「じ」と書く

のです。

9 「はなぢ」か「はなじ」か

【問】 「鼻血」は「はなじ」ではありませんか。

【答】 「鼻血」は「はなぢ」です。その「ぢ」は二語連合によって「ち」が濁ったものです。

10 「づつ」か「ずつ」か

【問】 「一つづつ」と書くのが正しいですか。「一つずつ」と書くのが正しいですか。

【答】 「ずつ」です。これは「つつ」の連濁でなく、「ずつ」という接尾語になっているものと解釈しているのです。

11 「まぢか」か「まじか」か

【問】 「卒業の日も〔まぢか〕にせまった。」で、どちらを選択するかという問題が出ました。どちらが正しいのでしょうか。

【答】 「ま近に」で「まぢか」です。「手近」「身近」なども、みな「手ぢか」「身ぢか」です。

なお「ま近」の「ま」は、一般に「間^ま」の意味に解して「間近」と書いています。もっとも、それがほんとうの語原かどうかは未詳です。

12 「世界じゅう」か「世界ちゅう」か

【問】 「世界中」は「世界ちゅう」と書くのが正しくはありませんか。

【答】 「うち中」「村中」などの「中」は、すでに接尾語として固定しており、初めから「ジュウ」という音だと見て、文部省著作教科書には「うちじゅう」「世界じゅう」というふうに書いてあります。

13 「基づく」か「基く」か

【問】 これまで普通に「基く」と書いていましたが、近ごろは「基づく」と書いているのを見受けます。どちらがよいのですか。

【答】 今日でも公用文では、「基く」と書くことになっていますが、教科書では「基づく」と書いています。しかし、これなどはなるべく「もとづく」とかなで書いてほしいことばです。

14 「魚づくし」か「魚ずくし」か

【問】 「魚づくし」と書いてある本と「魚ずくし」と書いてある本とがあります。どちらが正しいでしょうか。

【答】 現行のきまりとしては、「魚^つ尽し」の連濁として、「魚づくし」と書くのが正しいでしょう。なぜならば、「魚」と「尽し」との二語に分けて考えられるからです。

15 「腕づく」か「腕づく」か

【問】 「腕づく」の「づく」は何の意味ですか。そして、それは「づく」ですか「づく」ですか。

【答】 「腕づくで来い。」というような文句の中で、その「腕づく」ということばの意味はわかりませんが、その中の「づく」というのはどういふことかちよつとわからなくなっています。そういうふうには、だれでもすぐにわからないような場合には、すべて「ず」に書けばよいのです。

16 四段活用か五段活用か

【問】 「書く」という動詞は、「か・き・く・け」の四段に活用するから、四段活用と名づけられていたが、現代かなづかいでは、「書こう」という書き方ができたから、語尾は「か・き・く・け・こ」の五段に活用するように変りました。したがって、五段活用というべきなのに、文法教科書によっては四段活用にしています。未然形という一つのわくに、「か」「こ」の二字があるのは、現代かなづかいのつじつまが合わない点ではないのですか。

また、「大きい」のかなづかいを、「おう」と區別して、「おお」と書けといったり、同じ「つめ」を、

「なまづめ」「ひづめ」と書き分けさせるなど、現代かなづかいには無理が多いようですが。

【答】

(1) 現代かなづかいで書く文章の上に新しい口語文法を立てる以上、これまでの四段活用を五段活用と呼ぶこともあり得ることで、現に大正五年、国語調査委員会編の「口語法」でも五段活用としてあります。現行の文部省著作「中等文法」では、文語法との関連と、これまでの活用表の立て方のわく内で説明しようというたてまえから、従来のまま四段活用としてありますが、これは新かなづかいでは、「オ」の段にも活用するという文法的事実を曲げているものではありません。そして、これを「ア」の段の活用語尾と合わせて一つの未然形の中に並べておきます。一つの活用形の中に二つの活用語尾を並べてはいけないというのではなく、これまでも未然形に「し・せ」または「し・せ・さ」を並べた例があります。それと同時に、未然形をアの段とオの段とに分けて説明する人があっても、さしつかえないはずで、これらのことは、文法の説明上の問題であって、かなづかいの問題ではありません。

(2) 「大きく」「多く」などの「おお」の書き方は、

「お」の長音ではなくて「おお」であるという考えに基いたものであります。

(3) 「蹄」を「ひずめ」と書けということはどこにも規定してありません。文部省著作教科書では、これを「ひ」と「つめ」とに分解して考えることを必ずしも生徒に要求しないというたてまえで「ひずめ」と書いたままであって、これを分解して「ひづめ」と書くこともできます。

それでは一語に二種の表記法があつて困るのではないかということになりますが、この類の語はきわめて少数で、それはわれわれが一般に使っているうちに自然に落ち着くものと考えられます。

第二集（昭二九・一〇）

17

【問】 「オーイ」という呼び声は「おおい」か「おうい」か。

【答】 普通のことばの長音は、エ列の長音もオ列の長音も、すべて「あ、い、う」の三母音字で表わしますが、感動詞は、とくに昔から「あ、い、う、え、お」の五母音字をすべて使って表わします。たとえば、

ああ いいえ ふうん ええ おお おおい

古典の例では、たとえば、

後から「おおい、おおい、田舎者、返せ、返せ」と申して
(狂言記 大日本国語辞典)

とあり、現行の教科書では多くは「おうい」となっていますが、どちらに書いても誤りではありません。

返事の「おお」も、古典に「おお」「おう」両方の用例があります。たとえば、

おお、それよ。人の話に聞きおきし、

(近松、加古教信七墓廻、大日本国語辞典)

おう、それ、それ。その伊勢本。伊勢本。

(狂言記、いの字、大日本国語辞典)

18

【問】 「大阪」を「おおさか」と書くよりも、むしろ「おうさか」と書くことに統一してほしい。

【答】 一つの希望意見としてはもっともなことですが、現行の規定では「おおさか」です。

19

【問】 「ぢ、づ」の例外の書き方は、固有名詞にも適用しますか。

次の地名の新かなづかいをお尋ねします。

【答】 現行のきまりでは――